

白氏文集 十二 太行路

加藤 淳平

太行路

太行の路

借夫婦以諷君臣之不終也 夫婦に借りて以て君臣の終らざるを諷する也

太行之路能摧車

太行の路は 能く車を摧くも

若比人心是坦途

若し人の心に比すれば 是坦途なり

巫峽之水能覆舟

巫峽の水は 能く舟を覆へすも

若比人心是安流

若し人の心に比すれば 是安流なり

人心好惡苦不常

人心の好惡 苦だ常ならず

好生毛羽惡生瘡

好めば毛羽を生じ 惡めば瘡を生ず

與君結髮未五載

君と髮を結びて 未だ五載ならざるに

忽從牛女爲參商

忽ち牛と女の 參と商になるに従ふ

古稱色衰相棄背

古しへより稱す 色衰ふれば相ひ棄背すと

當時美人猶怨悔

當時の美人 猶ほ怨悔す

何況如今鸞鏡中

何ぞ況んや 如今鸞鏡の中

妾顏未改君心改

妾が顔未だ改まらざるに 君が心改まる

・・・・・

行路難 難重陳

行路難し 重ねて陳ぶること難し

人生莫作婦人身

人と生まれて 婦人の身になる莫れ

百年苦樂由他人

百年の苦樂は 他人に由る

行路難 難於山 險於水 行路難し 山よりも難く 水よりも險し

不獨人間夫與妻

獨り人間の 夫と妻のみならず

近代君臣亦如此

近代の君臣 亦此の如し

君不見左納言右內史

君見ずや 左納言右內史

朝承恩 暮賜死

朝に恩を承け 暮に死を賜ふ

行路難 不在水 不在山 行路難し 水に在らず 山に在らず

只在人情反覆間

只 人情反覆の間に在り

(大意) 太行(漢土の河北・山西兩省間の山脈)の難路は車を壊すけれども、人の心に比べればまだ平坦。巫峽(長江三峽の一つ)の激流の水は舟を顛覆させるけれども、人の心に比べればまだ穩やか。

人の心の好き嫌ひは變り易く、好きになれば猫っ可愛がり、嫌ひになれば悪いところばかりが眼につく。結婚して五年にもならない夫と妻が、初めの牽牛織女から絶対に相逢はないオリオン座とさそり座に變る。昔から女は容色が衰へたら棄てられると云ひ、昔の美人は怨み悔やんだ。今はそれどころではない。鏡の中の容色は前のままなのに男は心變り。人生は難しい。女に生まれるものではない。一生の苦樂は他人次第。人生の行路は山よりも難しく水よりも危険だ。難しいのは男と女の間だけではない。今の世の君臣の關係も同様。天子の幕僚や大臣も、朝には重用されて晩には死を命ぜられる。人生の行路の難しさは、水にあるのでも、山にあるのでもない。ただ人情の恃み難さにある。

よく知られた詩です。人間関係・男女関係と宮仕への難しさを詠ったこの詩を、古來多くの讀者が、共感を籠めて讀み、暗誦して來たことでせう。

(平成二十八年九月二十八日受附)